

ツングース諸民族の口承文芸について

風 間 伸 次 郎*

The Oral Literatures of Tungusic Languages

Shinjiro KAZAMA

In this paper the oral literature (folklore texts) of Tungusic languages will be analysed mainly on the basis of the author's field materials. The following problems will be considered: §2) the variety of stories (folktales, legends, and myths, §3) the characters in the stories, §4) the rhetoric, §5) the similarities between Tungusic folktales and neighbors' (Ainu and Japanese).

1. はじめに

本稿では、ツングース諸語の口承文芸について、その内容（2節）、登場人物（3節）、表現形式・言語形式（4節）、隣接諸民族の口承文芸との類似（5節）、の各方面から考察することを目的とする。

1.1. ツングース諸語とツングース諸民族

ツングースの諸民族は、東はカムチャッカ、サハリンからイェニセイ河流域に至る東シベリアに広がり、他方、南は満洲に及び、新疆にも分布する。行政的な国家単位でみれば、ロシアもしくは中国における少数民族ということになる。生業は多岐にわたる。例えば、エウエンキーやエウエン、ウイлтаの多くはトナカイ遊牧民であり、ウデヘは狩猟・採集民、ナーナイやウルチャは漁労民である。

ツングース諸語は以下の13ほどの言語からなる。エウエン語、エウエンキー語、ソロン語、ネギダル語、オロチ語、ウデヘ語、ヘジェ語、ナーナイ語、ウルチャ語（ウリチ語）、ウイлта語（オロッコ語）、満洲語、シベ語、女真語、である。このうち女真語はすでに死語である。満洲語は清朝を建てた満洲族の言語で、モンゴルを通じていわゆるウイグル系の文字を採用し、豊富な文献を今に残している。エウエンキー、エウエン、ナーナイではソビエト時代に入ってキリル文字による正書法が制定され、ある程度は使用されてきた。

* 東京外国語大学 (Tokyo University of Foreign Studies)

キーワード ツングース諸語、口承文芸、民話、現地調査

Key Words Tungusic languages, Oral literatures, Folklore texts, Field work

他の言語は基本的に無文字言語である。その人口は少なく、話者数は6万程度と推定される。程度の差はあるが、シベ語を除き消滅の危機に瀕した言語である。

筆者はこれまでもっぱら現地調査によって上記の言語を研究し、主に言語学的な研究資料を得る目的でこれらの言語の口承文芸を録音し、書き起こしてきた。翻訳を付してこれまでに刊行してきた口承文芸は以下の表に示すとおりである。なお「その他」には、民俗学的な情報・個人的な話・歌・ことわざ・なぞなぞなどが含まれる。歌は基本的に即興歌である（子守唄を除く）。実際にはジャンルの判断は難しい場合もある。

表1: 筆者の記録によるツングース諸民族の口承文芸（1990～2009, 2011年1月現在）

言語	文献刊行年(全テキスト数: 民話/伝説/その他)
エウエン語(40: 37/2/1)	2003(5: 5/0/0), 2009a(35: 32/2/1)
ソロン語(21: 15/6/0)	2005a(4: 3/1/0), 2007(9: 6/3/0), 2008(8: 6/2/0) ※2007および2008はトヤー氏との共著
ネギダル語(5: 3/1/1)	2002a(5: 3/1/1)
ウデヘ語(241: 45/12/184)	2004(71: 38/1/32), 2006a(23: 1/1/21), 2007a(31: 0/4/27), 2008a(36: 0/2/34), 2009b(42: 1/4/37), 2010a(38: 5/0/33)
オロチ語(20: 8/5/7)	1996a(20: 8/5/7)
ナーナイ語(121: 99/14/8)	1991(8: 4/1/3), 1993(9: 9/0/0), 1995(7: 5/2/0), 1996b(5: 3/2/0), 1997(12: 10/2/0), 1998(10: 9/0/1), 2000(9: 7/0/2), 2001(12: 12/0/0), 2002b(6: 6/0/0), 2005b(6: 6/0/0), 2006b(5: 5/0/0), 2007b(9: 8/1/0), 2008b(7: 7/0/0), 2010b(16: 8/6/2)
ナーナイ語コンドン方言(3: 3/0/0)	2006c(3: 3/0/0)
ウルチャ語(43: 21/12/10)	1996c(8: 4/4/0), 2002c(4: 3/1/0), 2006d(9: 7/2/0), 2008c(11: 4/5/2), 2010c(11: 3/0/8)
計(494: 231/52/211)	

ナーナイが多くを占めている反面、エウエンキー、ヘジェ、ウイルタ、満洲、シベのものが欠けている。したがって本稿での考察は主に上記のようなナーナイをはじめとする言語の口承文芸に偏った内容となっている。一方、ツングースではないが、近隣のアイヌとニブフに関しては、5節以外でも若干言及する。

筆者以外のロシアの研究者が収集したものでは、エウエン Novikova (1987), エウエンキー Vasilevich (1936), ネギダル Tsintsius (1982), Khasanova i Pevnov (2003), ウデヘ Simonov, Kjalundzuga i Khasanova (1998), Nikolaeva, Perekhvalskaja i Tolskaja (eds.) (2003), オロチ Avrorin i Levedeva (1966), ナーナイ Avrorin, V. A. (1986), ウルチャ Sunik (1985) などに多くの口承文芸が収録されている（ただしNovikova (1987)はロシア語

のみ)。ウイльтаでは、池上 (1984, 2002) がある。無論これらに収録されている口承文芸についても詳細な検討が必要であるが、本稿では十分に検討・考察できていないことをこ
とわしておく。

1.2. ツングース諸民族の口承文芸のジャンルとその名前

以下では、主要な2つのジャンルについて、これを取り上げる。他にも個人的な談話、歌やなぞなぞ、早口言葉などがあるが、本稿ではとりあげない。下記にみるように、言語によって、音的に対応する語形とそれが指している実際のジャンルにずれが生じているものがあるので、注意が必要である。

1.2.1. 民話

ロシア語で“skazki”、日本語で「民話」と主に翻訳されているジャンルのものは、彼ら自身にとっては架空の話と考えられている。各言語におけるその名称は次のとおりである。

エウエン:nimkaan、エウエンキー:nimjaakaan、ネギダル:təəlum~təəlun、ソロン:uligar
オロチ:nimapu、ウデヘ:nimaŋku
ナーナイ:nijmaan、ウルチャ:nijma(n)、ウイльта:saxuri

ネギダル、ソロン、ウイльтаの3言語以外の語形は互いに対応し、同一の語源に溯るものである（音対応の規則による説明は省略する、各語形は基本的に筆者調査によるものであるがそうでないものもある、その場合、出典はもっぱらTsintsius (1975, 1977)による）。ネギダルの語形は他の言語で「伝説」を意味する語と対応する（1.2.2. 参照）。ソロン語の語形はモンゴル語からの借用である。これはソロン語がモンゴル語からの強い影響を受けた言語であるためであろう。ウイльта語の語形と対応する語は、次の3言語に確認される。

オロチ:sauxari、ナーナイ:sioxor、ウルチャ:seexuri

これら3言語におけるこの同源語は、「外国の話、異民族の話」とされている（Avrorin 1986: 17, Sunik 1985: 231）。ただしOnenko (1980: 366) ではナーナイ語の sioxor について、英雄叙事詩(Osovyj zhanry geroicheskogo eposa)であるとしている。

他方、ウイльта語の nijmaa は、池上 (1984: i) によれば次のようなものであるという。

語り物である。語りの部分とふしをつけて歌う部分とからなる。前者はウイльта語、後者はキーリン語（エウエンキー語の一方言）である。ニグマーはキーリン人からつたえられたものであろうが、一篇のながさもながく、ウイльтаの口頭文芸の中では重要なものである。（中略）サフリとニグマーが語られる際には、語りてが語るきれめきれめに、これをきくききてがあいのに gəə という発声をする。テールグにおいてはこれがない。

このウイルタ語の *nigmaa* に対応するものは、エウエンとエウエンキーにあり、ロシア語では“*epos*”と呼ばれている。エウエン語やエウエンキー語で何と呼ばれているのか、現在のところ筆者には不明である。筆者はエウエン語のものをヤクーツクで録音したことがあるが、未整理のままである。これの整理・研究は今後の重要な課題である。

1.2.2. 伝説

これはロシア語で“*legendy*”、日本語で「伝説」などと翻訳されるもので、話者には実際にあったことと信じられているものである。かなり奇想天外な話を含むが、彼らには基本的に事実とみなされている。それは近代社会における自然科学的世界観の役割を果たしており、世界の成り立ちなどを説明するものであって、神話なども多くの場合ここに入る。

エウエン: *təələn*、エウエンキー: *təələn*、ネギダル: *ulguu*、ソロン: (不明)

オロチ: *təəlun̄u~təəlumu*、ウデヘ: *təlun̄u*

ナーナイ: *təəlun̄gu*、ウルチャ: *təəlun̄gu*、ウイルタ: *təəlun̄u*

ネギダル語以外の語形は互いに対応する。ネギダル語の語形は1.2.1 でみたウイルタ語の *uligər* と同じく、モンゴル語からの借用であると考えられる。

2. ストーリー

ここでは、民話 (2.1.)、伝説 (2.2.)、神話 (2.3.) の3つのジャンルに分けて順に見てゆくこととする。さらに、世界観・自然観 (2.4.) もここで取り上げる。上述したように、語り手たちにとって、神話は伝説の下位分類とみなされているが、その内容が多岐にわたるため、別に1節を設けることとした。

2.1. 民話

ここでは英雄説話 (2.1.1.) と異類婚姻譚 (2.1.2.)、隣の爺型民話 (2.1.3.)、動物民話 (2.1.4.) という4つのタイプの民話を取り上げる。しかるのちに、「死と再生」 (2.1.5.) というテーマにも触れる。

2.1.1. 英雄説話

男性の主人公はナーナイ語で *mərgən* と呼ばれ、他のツングース諸語の多くでもこれに対応する語が用いられている (Tsintsius 1975, 1977, ただしウデヘ語における使用は稀である、ウデヘ語では *jəgdigə* がよく使われる)。 *mərgən* という語自体はモンゴル語から借用されたものと考えられる。

この *mərgən* が活躍する民話がいわゆる英雄説話で、ナーナイの民話ではその最も多くを占める (風間 1991: 95-104, 1993: 20-85, 1995: 37-78, 1998: 47-62, 86-104, 2001: 205-

233, 274-308など)。長さも長いものが多くあり、主人公の孫の代に至るまで、3世代に亘って話が展開するものもある。

基本的にムルグンが旅に出て、行く先で敵を倒し、嫁を得て、敵の村などの人々を連れて根拠地に帰るまでの話である。

2.1.2. 異類婚姻譚

ツングースの民話における異類婚姻譚では、もっぱら男性のほう人間ではない姿で現れ、普通の人間である女性を困惑させ、その後「覆い」を脱いで人間の姿になる、という展開をとるのが普通である。生物の場合、男の主人公（ムルグン）がとる姿はクマ、ヘビ、カエル、カラス、トンビなど、一般にあまり好ましく思われていない動物である。無生物である場合もかなりあり、その場合男性がとる姿は石、谷地坊主、カビだらけのズボン、水瓶、などである。エウエンでも一つ異類婚姻譚を採集することができたが、男性がとる姿は虫で、話の筋もアムール流域のものなどとは大きく異なっている。

クマ（ウデヘ 風間 2004: 50-84, ナーナイ 風間 2002b: 55-71, 2008b: 26-45）、
※ただしナーナイのものでは最初の部分が異なっており、男たちはクマで登場しない
ヘビ（ナーナイ 風間 2000: 67-91, 158-194）、カエル（ナーナイ 風間 2008b: 46-56）、
カラス（ウデヘ 風間 2004: 98-103, 246-264, ナーナイ 風間 2007: 64-74, 75-92）、
トンビ（ナーナイ 風間 1996b: 2-51）、虫（エウエン 風間 2009a: 232-239）

石（ナーナイ 風間 1993: 20-85, ウルチャ 風間 2008c: 77-83）、
谷地坊主（ナーナイ 風間 1995: 37-78）、カビだらけのズボン（ナーナイ 風間 1997: 49-56）、ヤカン（ナーナイ 風間 2000: 158-194）、水瓶（ナーナイ 風間 1997: 68-79, 2007: 131-174）

また異類ではないが、美男子であるムルグンが、わざとたいへん醜い顔の男の姿で現れて、女主人公（プジン *pujin*）を試したりする話もある（ナーナイ 風間 1998: 86-104, 105-115, 2007b: 93-120）。

女性が姉妹などで暮らしているところに、それらの異類のモノが訪れる。そして一泊したり、トンビが女性の頭の上にフンをするなどの行為によって、女性が妊娠してしまう。姉妹が二人以上いる場合、こうした異類の嫁となるのは一番下の妹である（もしくは全員）。

ナーナイなどをはじめとして、かつてツングースでは女性が親の許可を得ずに男性と付き合ったり、婚姻を結んでいない男の子を身籠ることは、大きなタブーであった。これは、男性が嫁を娶る際には婚資を払わなければならない、それゆえ親にとって娘が大きな財産であったためでもある。したがって、いきなり妊娠してしまうことは女性にとっての大事件であり、それがゆえに物語は盛り上がった展開を見せることになる。

その後、「覆い」を脱ぐことになるが、これにはいくつかのパターンがある。まずその1つには、ある晩に女性が目覚めると家の中が昼間のように明るくなっており、足許に「覆い」のある美しい男性が寝ている、というパターンが多くみられる。他に、異類の夫の足跡を追っていくと、木の下に覆いが脱ぎ捨てられており、さらに行くとムルグンに出会うというパターンもある。

ムルグンがなぜ異類の姿をしていなければならなかったかが、説明されることもある。それは、敵の目を欺くため、もしくは男の子が生まれては死に、生まれては死に、ということが続いたため、などと説明されるのが普通である。

唯一の例だが、ムルグンが異類の姿で現れるのではなく、夫婦で子がなく暮らしていたところ、いきなり妻が3匹のヘビを産んでしまう、という展開の話もある（ナーナイ 風間 1996b: 52-64）。

なおブジンのほうが変身することもないわけではないが、それはまず人間の姿で現れたのち、種々の目的から変身するのであって、異類婚姻譚と呼ぶべきものではない。最初は雌犬として登場し、最終的にこれがブジンになるという話（ナーナイ 風間 2002: 46-54, 2010: 192-206）もあるが、やはり異類婚姻譚ではない。

2.1.3. 隣の爺型民話

このタイプの民話は、これまで筆者が記録してきた民話の中にはそれほど多く観察されない。正直者で貧乏な男と強欲で金持ちな男が住んでおり、正直者が何らかの手段で多くの獲物や富を得る。金持ちな男は、それを真似してやはり富を得ようとするが、失敗して自らの富も失い、死んでしまったりする。ツングース諸民族の間にもっとも広まっているのは、死んだフリをして横たわっていると、ウサギたち（や動物たち）が家まで運んで来て、それを家の中で全部叩き殺してたくさんの毛皮を得る、という話である（ソロン 風間 2008: 24-28, ウデヘ 風間 2004: 334-340, オロチ Avrori ni Lebedeva 1966: 42-43, ナーナイ 風間 1995: 160-168, ウルチャ 風間 2010c: 59-66）。なおこの話はアイヌにも類話があり、獣はキツネになっている（知里編訳 1937: 77-83）。エウエンの話では、おばあさんが獣たちを呼び寄せる点で異なっているが、やはり集めてから全部叩き殺す点では同じである（エウエン 風間 2009a: 398-399）。ウデヘには日本の「花咲爺」によく似た話があるが、これは漢民族からの影響ではないかと考える（風間 2004: 380-393）。

さらにこれに類似したものに、利発者の兄と、間抜けな弟が兄弟で住んでいる、として始まる物語がある。そこでは兄が（悪）知恵を働かせて富を得るのに対し、弟はその真似をするものの、頭が悪いために失敗するというストーリーである。アムール左岸のナーナイ（コンドンやジュユンの方言）では、兄の名前がアキア（aki a）、弟の名前がウジュー（uǰəə）となっている民話はいくつも得られている（未発表）。エウエンでも、やはり利口な兄と、ウインジャ（uuiŋǰə）という愚かな弟の物語がよく行われている（エウエン

風間 2009a: 29-52, 181-194, 294-297)。アムール左岸のナーナイのものは、エウエンキーなどから伝わった可能性もあり、今後の研究が必要である。なおウイルタにも「アルガッチャとプクシュガ」という同様の話（池上 1984: 58-62）があり、池上（1984: 62）では、ウルチャから伝わった話であろうとしている。兄の名がアルガッチャ、弟の名がプクシュガであり、アルガッチャのアルガ（arga）はモンゴル語由来の語で「奸計」の意である（池上 1984: 62）。筆者はこの話を、さらにナーナイ語のコンドン村の方言調査時に得たが、未発表である。

2.1.4. 動物民話

動物を擬人化した話で、動物同士の知恵比べなどを語る話である。ふつう子供用の話（すなわち、子供を寝かしつけるために語るもの）であると考えられているようだ。擬音語が豊かに使われることがあるが、これも子供を喜ばせる技法の一つであるのかもしれない。動物の登場人物がセリフを語る時には、独自のイントネーションをとることもある。

アムール流域で最もよく観察されるのは、「ネズミとカエルが暮らしていた」という話である（ナーナイ 風間 1997: 106-109, なお下流のニージュヌイ・ハルベ村でも同じ話を収集したが未発表である）。サハリンのウイルタにも類話がある（「ねずみの母親とかえるの母親」 池上 1984: 85-88）。ウデヘ語ではリスとカメによるバージョン（風間 2004: 95-97）と、リスとカエルによるバージョン（風間 2010: 177-179）を得ている。いずれも二人でベリーを採りに行き、ネズミもしくはリスは木に登って好きなだけ食べ、カエルもしくはカメをいじめ、その後カエルもしくはカメが復讐する、というストーリーである。どちらの言語のバージョンでも豊富な擬音語が観察されるが、特にナーナイのものでは翻訳の難しい擬音語が大量に現れている。

「カエルとブジンと」（ナーナイ 風間 1993: 243-250）や「一匹のカエルと一人のブジンが暮らしていた」（ナーナイ 風間 2000: 266-273）では、カエルのセリフが独特のイントネーション（文節末から2モーラ目を高く発音する）で語られる。

「5.2.1. 因幡の白兔」の項で詳しく取り上げるが、キツネを主人公とする話がツングースに広く分布している。この話では、キツネのセリフは「・・・コリコリオ～（kori kori-o～）」、アオサギのセリフは「・・・コイシ（koisi）」など、その獣独自のリフレインで終わることが観察される。

2.1.5. 死と再生

ムルグンが死者を再生させる、もしくは瀕死の者やひどく老いた者を若返らせる方法には、きまったやり方がある。それは、つかんで頭越しに後ろへ放り投げるというやり方で、地面に下りた時には、まっすぐ足で立ち、生き返ったり若返ったりしている、というくだりである（ナーナイ 風間 1996b: 63など）。

ブジン（たち）がムルグンを再生させるやり方はもっぱらシャーマンすることによる。三日三晩シャーマンすると生き返る、というくだりがある（ウルチャ 風間 2002c: 23-24）。

体の一部分でも残っていれば、そこから再生することができる。小指（もしくはその骨）だけになってしまったムルグンを、ブジン（たち）が上記のようにシャーマンすることによって蘇らせる話がいくつか収集されている（ウデヘ 風間 2004: 176-183, ナーナイ 風間 2001: 178-204）。棺桶の中に入ったムルグンの死体が川を流れて行き、流れ着いた先でこれを引き揚げたブジンが再生させるという話もいくつかある（ウデヘ 風間 2004: 176-183, ナーナイ 風間 1993: 168-211, ウルチャ 風間 2002c: 17-25）。

魔物が何度も生き返ってくる話もある（ナーナイ 風間 2001: 178-204）。そこでは魔物は娘の力を借りるなどしてさまざまな方法で生き返ろうとする。しかし最後には全部燃やされてしまう。娘も焼かれる。

語り手によれば、丸ごと食べられてしまった場合にも、二度と生き返ることはできないという。

2.2. 伝説

伝説については、巨人伝説（2.2.1.）、由来譚（2.2.2.）、教訓的な話（2.2.3.）、の3つを扱う。

2.2.1. 巨人伝説

これについては、風間（1995: 3-5）に詳しく記したので、そちらも参照されたい。筆者自身が記録したのは、ナーナイ（風間 1995: 178-179）、ウルチャ（風間 1996c: 2-7, 42-49）のものである。下記のように「巨人」を意味し、ツングース間で対応する語がある。エウエンキー語やネギダル語、オロチ語では「山や森の主人」という意味でも用いられるようだ。

エウエンキー（北バイカル方言）：kalu、ネギダル：kalgam、オロチ：kaagjamu
ナーナイ：kalgam、ウルチャ：kaljamı、ウイльта：kaljami

下記にみるように、エウエンキー語以外の言語で、その「巨人」の特徴はよく一致する。

- ・オロチ：「身長は5メートルで、先の尖った円錐形の頭を持ち、手は三本指で足の付け根は曲がっており、足の先はヘラジカの蹄になっている。一族皆で連山の岩屋、洞穴、峡谷に住み、木のヤニやヘラジカの肉、魚を食糧とする。人を攫いに山から下りてきて、彼らのところに連れ去るが、食べたり殺したりはせず、彼らと一緒に住ませようとする。」（Avrorin i Lebedeva 1978: 193より要約）
- ・ウイльта：「背が高く頭が尖っており、血を怖がり、水たまりを渡らない。人間の子供を攫い、目、口、鼻へやにを塗りつける。石の家に住む。腰に小さい入れものをさげる

が、その中には人間や獣の爪が入っている。」(池上 1984: 16より要約)

筆者収集の資料によれば、ナーナイやウルチャにおいても巨人の特徴はほぼ同じである。ただし文献によっては二本指としているものもある。この巨人の腰にある小さい入れ物を得ると、狩りの幸運を得ることになる。

ニブフにもこの巨人の伝説がある。アウステルリッツ (1992: 238, 252, 262) にみられる化け物である。焼け火箸や真っ赤に熱した斧を手渡すことによって、この巨人を撃退するくんだり、ウルチャのもの (風間1996c: 2-7)、ウイлтаのもの (池上1984: 17-22)、ニブフのものに共通してある。

2.2.2. 由来譚

まず、野生動物の特徴や性質について、その由来を説明するものがある。

- ・ライチョウは胸に肉があり背中に無い。一方、アカシカは腹の中に肉がある。このことについて、両者は肉を交換したのであるという (ウデへ 風間 2007: 130-131)。

- ・カラスとカササギの体色と模様について。射日神話にあるように (2.3.2で後述)、大昔は太陽が3つあったため、地上の温度はたいへんに高かった。カラスはこの時全身を日に晒していたため、真っ黒焦げになり、カササギは体の半分が岩に隠れていたために、あのように白黒の体になったのだという (ナーナイ 風間 1995: 183-184)。

昔、オロチの数はとても多く、そのため家からの煙のせいでガンは黒くなったのであるという (オロチ 風間 1996: 47)。

エウエンでは、2.1.3.で触れた愚かな弟ウインジャが、森の獣に、ウサギ、キツネ、クズリなどの名前を与えたということになっている。さらにウインジャはオオカミを調教し、人間の家畜としての「犬」を誕生させたのであるという (エウエン 風間 2009a: 294-297)。

死や老い、といった抽象的なものについての由来譚もある。エウエンには老いの由来譚がある (風間 2009a: 400-401)。ネギダルの話によれば、天があらゆる生き物を創造していた時に、「皆が不死であれば、地上はいっぱいになってしまうだろう」と考えたある者が、死すべき肉体を生き物たちに与えたのであるという (風間 2002a: 30-36)。なおこの話は創世神話でもあり、まず最初に天が生まれる。天は動物たちに「二本足で黒い髪のある者を見たら逃げよ、」と教える。イノシシ、ヤマドリ、犬の習性の由来譚でもある。

蜂や蚊、ブヨなど、北の大地に多く存在し、人間にとって有害な昆虫についての由来譚もある (3.4. で後述する)。

かつてオロチは読み書きをしたが、嵐に遭って書物を干した時に書物が風に吹き飛ばされ無文字民族となった、とする伝説がある (オロチ 風間 1996: 48-49)。

シャーマンはもともとある一つの氏族 (ザクソル氏族 jaksor) にのみ存在し、他の氏族にはいなかった。しかし天窓だけを閉め忘れていたために、そこから木偶たち (スウン sawaən) が飛び去って行ってしまい、散り散りにいろいろな氏族のところに降り立った。

このため他の氏族にもシャーマンがいるようになったのであるという（ナーナイ 風間 1995: 183-184）。

天体や天文現象の由来についてもいろいろな伝説がある。月の模様の起源について、ナーナイの伝説では、月に引き取ってもらったカエルの娘が天秤を担いでいる姿であるとしている（風間 1993: 243-249, 2001: 266-273、ナーナイ語コンドン方言 風間 2006c: 110-123）。ウデヘでは、ひどくこき使われた奴隷の娘をやはり月が引き取ったのであるとしている（風間 2009b: 89-91）。

日蝕については、日蝕そのものの起源とはしていないものの、嫁とりに来たカラスが太陽を消してしまい、真っ暗になる、という話がある（風間 2004: 98-103、ただしこれは伝説ではなく民話であろう）。月蝕については、犬が月を食うものと考え、月蝕になると人々は物音を立ててその犬を追ひ払う、ということが行われた（ウデヘ 風間 2004: 24、なおこれは実話である）。

天の河については、一人の女をめぐって競争した二人の男のスキーの跡である、とされている（ウデヘ 風間 2009: 92-93）。天体に関する世界の民話に関して、日本民話の会・外国民話研究会編（1997）がある。そこには上記のものの他に、夜の起源に関するエウエンキーの話が掲載されている（日本民話の会・外国民話研究会編 1997: 24）

2.2.3. 教訓的な話

怠け者の小鳥、もしくは女の子がいて、何だかんだと理由をつけて母親の手伝いをしないために、後に憂き目を見る、という「働かざる者食うべからず」を意図した教訓的な話がある（エウエン 風間 2009a: 386-392, オロチ 風間 1996a: 73-77）。

大目玉とかき混ぜ棒とイクラと草の束が住んでいて、ある時料理を作ろうとしたが、皆怠け者で経験が無く、結局一人ずつ死んでいって誰もいなくなってしまう、というシュールな話がある（ナーナイ 風間 2010b: 83-87）。ナーナイ語ビキン方言のテキストとしてもこの話は採集されている（Sem 1976: 127）。これは筆者が採集した時には、やはり「怠け者であってはならない」、という教訓的な話として語られた。教訓的な話ではないが、エウエンにこれの類話がある（風間 2009a: 406-407）。

なおこれらの話は伝説として扱ったが、民話である可能性も考えられる。

2.3. 神話

以下にみる神話の諸テーマに関しては、荻原（1996）に詳しい論考がある。ツングースの周辺やアジアの他の諸民族における分布等については、荻原（1996）を参照されたい。以下では、筆者が現地で実際に録音したものに限っての情報を述べる。ここで扱うのは、創世神話（2.3.1.）、射日神話（2.3.2.）、姉弟始祖神話（2.3.3.）、世界観・自然観（2.3.4.）、である。

2.3.1. 世界創造の神話（創世神話）

創世神話と考えられるものは、2.2.2.で取り上げたネギダルのもの他に、ウデへとナーナイのものを収集することができた。両者は共におばあさんがワタリガラスの力を借りて世界を創造するもので、次のような筋である。

ウデへ：あるおばあさんに、別のおばあさんが夢の中で指示を与える。おばあさんは自分のすねを削り、ワタリガラスの助手を使ってそれを世界中に撒く、そこから世界ができる（風間 2006: 130-136）。

ナーナイ：最初は天界にいるヒゲの長いおじいさんから話が始まる。おばあさんとワタリガラスが現れる。おばあさんの魚皮服の切れ端から世界の諸要素ができる。ワタリガラスはそれをばら撒く助手である。川の流れを一方向にする（風間 2007: 50-63）。

ワタリガラスは、チュクチやコリヤーク、北西海岸のインディアン神話において重要な位置を占めているという（宮岡 1987: 40）。大林他編（1993: 60, 223）には、それぞれチュクチと北西海岸インディアンのワタリガラスの登場する（創世）神話が紹介されている。しかし残念ながら上記のツングースのものとはあまり似ていない。宮岡（1987: 36-39）には同じく（ユピック）エスキモーのものを紹介されているがこれも似ていない。しかし、ツングースの創世神話にワタリガラスが登場し、重要な役割を果たしていることはこれまであまり注意が払われてこなかったようであり、注目に値すべきことと考える。

2.3.2. 射日神話

ウデへ：二つの太陽があった。昔は天は低かった。一つをスアンカ氏族の者が射落とした（風間 2007a: 239-240）。

ナーナイ：三つの太陽があった。ザクソル氏族の者が射落とした。シャーマンの起源の話であり、カラスとカササギの体色の由来譚でもある（2.2.2.に上述、風間 1995: 183-184）。

荻原（1996: 58-89）によれば、古代中国や朝鮮、台湾先住民に類話があるという。さらに、アムールの諸民族の射日神話の射手には「ハダウ」という創造主が登場するのが特徴的であるとしているが、筆者はこれまで「ハダウ」の登場する話に出会ったことはない。

2.3.3. 姉弟始祖神話

荻原（1996: 90-169）によれば、近親婚のモチーフはギリシャ神話や旧約聖書を含む世界各地の話に見出されるという。

ウデへ：姉が弟を騙して夫婦となり、息子と娘が生まれる。鳥による告発があり、息子を通じて父親（弟）は真実を知り、妻を殺し、子供たちを捨てる。息子はトラが育て、娘はクマが育てる。ウデへの女性は今でも自分の親族の男が獲ったクマの肉を食べてはならない（ウデへ 風間 2004: 305-318）。ナーナイのものも得たが、なお未発表である。

荻原(1996: 104-105)では、これを兄妹始祖神話として扱っているが、ロシア語もしくは英語を介したことに起因する誤りであろう。ツングース諸語では兄弟姉妹における年齢の上下は、全く違う語によって示されるため、原語に触れていればこうした誤解は回避することができる。

2.3.4. 世界観・自然観

ここでは、三層の世界観(2.3.4.1.)と、自然観としてトラ(2.3.4.2.)及びクマ(2.3.4.3.)をとりあげる。

2.3.4.1. 三層の世界観

ツングース一般に、世界は三層になっているという考えがある。空に飛び上がると、空に穴が開いていて、そこから天上界に出る。もしくは地面の下に行く穴があって、地下界(冥界)に出る、という世界観である。天界のようすが、「天にも空があり、天にも大地があり、天にも木があり、天にも太陽があり・・・」のように語られることも多い。天上界や冥界が登場する話には次のようなものがある。

- ・悪天候の続く中、一人のおばあさんが空の穴を通して天上界にのぼり、天上界を掃き清めると天候が回復するという話(ナーナイ 風間 1991: 104-111)。

- ・兄弟で暮らしていると、嵐の日に兄がいなくなってしまう。弟は天の穴を通して天上界に昇る。天上界で兄は妻は娶っていた。弟は兄嫁の妹と結婚した。その姉妹は北風の神と南風の神であった(ナーナイ 風間 1996b: 65-82)。

- ・兄弟が暮らしていた。ある日、弟が木の下で大便をすると、それが地面を貫いて冥界への穴ができた。その後兄がその穴に落ちた。冥界の人間たちには、地上界の人間である兄の姿は見えない。冥界の人間の言葉に従って、兄は牛の背に乗って地上界へ帰ることができた(エウエン 風間 2009a: 181-194)。

- ・真中の世界に姉弟が住んでいる。地下界から弟を呼ぶが、弟は地下界へ行こうとはしなかった(ネギダル 風間 2002a: 37-43)。

水中の別世界が出てくる話も多くある(ナーナイ 風間 2000: 43-66など)。

2.3.4.2. トラ

いくつかの大型獣は、狩猟民であるウデヘにとって特に畏怖すべき対象である。中でもトラは崇拝の対象ともなっている。ウデヘ語ではトラのことを *ku ti* というが、直接呼ぶのを避け、老人などを意味する間接的な名称である *odoo mafa* を使ったり、ロシア語を用いて *tig r* と言ったりすること多い。ナーナイ語では *pu rəənambaani* 「森の魔物」という言い方がされる。

トラはアムール中流域より南にしか生息せず、アムール左岸にはほとんどいないよう

だ。したがってトラについての話のもっぱらウデヘかアムール右岸のナーナイに多く見られる。ウルチャやネギダルにも若干見出される。具体的には下記のような話がある。

・クマが「地上にオレより強い者はいない」と自慢するのだが、トラは「二本足で歩く人間という者がいる」と教える。トラはクマを人間のところへ連れて行って見せてやるのだが、クマは自分より人間のほうが強いとは信じられず、戦って人間に撃たれてしまう。トラは森の獣たちに、「人間というものは恐ろしいから近寄るな、」と諭す。

(ウデヘ 風間 2004: 394-399)

なおこれと似た話はネギダルでも採集された、2.2.2. 由来譚の項を参照されたい。

・トラは天が地上の秩序（特に狩猟に關しての秩序）を見張るために置いた天の犬である。大きな川筋ごとにトラは配置されている。

(ウデヘ 風間 2007: 241-246)

・トラの教師はネコであった。それで両者の習性が似ているのである。しかしネコは自分の安全を考え、木に登ることだけはトラに教えなかった。

(ウデヘ 風間 2009: 168-169)

なおこれと同じ話はナーナイ語のシカチ・アリヤン方言でも採集できたが、なお未発表である。

トラが人間に恩返しをする、という伝説もいくつかある。

・トラが夢の中に現れて子供を差し出せと言う。山小屋に子供を一人残して獵師たちは麓の村に下りる。少年を追いかけてトラは木の股に挟まってしまう。少年はトラを助けてやり、その後は狩猟の幸運に恵まれる（ナーナイ 風間 1997: 90-94、ウルチャ 風間 2006d: 92-103）。トラを大蛇から助けて、その後狩りの幸運に恵まれる話（ナーナイ 風間 1996b: 83-88）や、トラの仔を育てて、その後狩りの幸運に授かったりする話（ナーナイ 風間 1996b: 89-94）もある。

上記は全て「伝説」とされているものである。他方、狩猟民であるウデヘにおいては、個人的な実話において、現実のトラとの関わりが語られるものも多く得られた。例えば、トラの獲物を取ったり、トラを殺した道具などを持っていたりすると、トラからしつこく追い回されるという（風間 2006: 117-118, 119-125）。トラのヒゲなどを得ると狩りの幸運に恵まれるという話もある（風間 2008: 185-189）。トラに救われたとする話もある（風間 2010: 82-85）。人家の近くにトラが現れ、居座ったため、遂にはこれを殺さなければならなかった、という話もある（風間 2004: 448-451）。

2.3.4.3. クマ

クマも特別な存在である。しかしトラほど崇拜されてはいないようだ。イノシシも、や

はり危険な大型獣とみなされているが、民話などに登場することはない。アイヌにおいてクマはカムイを代表する存在とみなされているが、ツングースにおいてはそれほど特別な扱いを受けてはいない。ナーナイ語では、*puræn mapa* 「森の おじいさん」という言い方がなされる。さらにただしくマの身体部位名称には特別な名詞が用いられるものがある（風間 1991: 84）。ウデヘ語ではヒグマなら *songo*, ツキノワグマなら *guaijima* であるが、これは特に間接的な呼び方というわけではないようだ。

民話では、クマは2.1.2.の異類婚姻譚で示したクマとの婚姻譚に登場するくらいである。動物昔話では、キツネに騙されるなど、むしろ愚鈍な存在として描かれている。伝説においても、「2.3.4.2. トラ」での伝説にあったように、トラの教えを聞かずに、人間に殺されてしまう思慮の浅い存在として登場する。

ウデヘの実話で全く具体的な狩猟の対象の一つとして語られるが、これはむしろ生業に関する人類学的な問題となるのでここでは扱わない。

3. 口承文芸中の登場人物

ここでは、英雄（3.1.）、女主人公（3.2.）、シャーマン（3.3.）、敵（3.4.）、魔物（3.5.）、その他の登場人物、について扱う。

3.1. 英雄（ムルグン *mergen*）

「2.1.1. 英雄説話」で触れたように、英雄説話の最後は、嫁や嫁の村・村の人々を率いて帰って来るという展開になる。そこで村や家を作り直し、人々を家に入れるのだが、その場面で決まって用いられる魔法やそれに対する決まった表現がある。まず、自分がかつて住んでいた家を蹴ると、美しく大きな家（九尋の家、十尋の家）になる。この表現は「4.3. 頭韻」の節で再び取り上げる。さらに、村の人々が住むための家に関しては、「大きく歩むと大きな家ができ、小さく歩むと小さな家できる」のであり、大家族の者は大きな家へ、小さな家族の者は小さな家へ入るように、と指示するのである。引っ越し時など、手を叩けばこれまであった村が跡形もなく消える、というような魔力も持っている（ナーナイ 風間 1996b: 47,50など）。また、首の後ろを叩くことによってハチなどをはじめとする別の姿に変身することができる。

「少年が一人で暮らしていた」として始まり、孤児のムルグンが活躍する話も多くある。両親をはじめ親類は全て仇に殺されてしまっており、少年だけが生き残っていたという設定である。「三年寝太郎」の話のように、冒頭でその少年は寝てばかりいる、という話もある（ウルチャ 風間 2008c: 69-76）。裸の少年が活躍する話もある（ナーナイ 風間 1993: 86-113）。

乞食の子供（ナーナイ語で *gioxaton*, ウイルタ語で *geuxaatu*）が活躍する話もある（ナーナイ 風間 1993: 114-167, 2000: 92-157; ウイルタ 池上 1984: 62-75）。しかしこれは

ムルグンではなく、語り手によれば話自体も外来のものであるという。

3.2. 女主人公（プジン puĵin）

女主人公（末の妹）が大活躍する話もあるが、多くは男性が主人公である。

「姉妹が暮らしていた」で始まる物語は非常に多い（ナーナイ 風間 1997: 3-48, 1998: 28-46, 2000: 3-42, 67-91, 158-194, 201-259, 2001: 101-129など、ウルチャ 風間 2002c: 26-46など）。「女（プジン）が一人で暮らしていた」として始まる物語もある程度ある（ナーナイ 風間 1993: 8-19, 2001: 178-204, 335-356）。いずれにせよ、その後はまず魔物や異類の姿の男がやって来るという展開になるものが多い。

末の妹が兄たちよりもはるかに強く、主人公として男勝りの活躍をする話もある（ナーナイ 風間 1997: 3-48, 2001: 274-308など）。そこではプジンは男の格好をして、男として戦う場合もある。しかし普通やはり女性も弱く、その武器はもっぱら裁断用の板で叩くぐらいである。

ごくまれに女主人公が男になる話がある。これはこれまでにウルチャで同じ話を二度記録したのみである。姉妹で暮らしていて、姉は嫁に行く。妹は義兄の家にはいた美人を交換婚で娶ろうとするが、自身は女である。そこにあるおばあさんが現れてその妹を男性に改造する、という話である（風間 2002c: 26-46, 2008c: 84-104）。ナーナイでも前半部がこれと似た話を採集したが、そこでは妹は最終的に男になることはなく、生き別れになっていた自分の弟を発見して無事に交換婚が成立する、という展開になっている（ナーナイ 風間 2000: 3-42）。

裸娘ピカチ（pikači）が活躍する話（ナーナイ 風間 2001: 114-131, 2005: 46-71）もある。pikaとは「上半身裸である」という意味の形容詞で、この主人公の名はそこから派生した語になっている。ピカチは髪の毛がバサバサで上半身裸で裸足の女の子である。したがってナーナイの文化においては全く非常識な姿をしている。しかし、刺繍をはじめとする魔法の力を持っていて、最終的には美人に変身し、良いムルグンの嫁になるという話である。

一般に女主人公は、強い力を持ったシャーマンであって、男の主人公を助ける者として登場することが多い。

女主人公も、やはり首の後ろを叩くことによってハチなどをはじめとする別の姿に変身することがある。兄たちが魔物に終わられて逃げる際に、妹を灰の中の針や木の枝に変身させるという話もいくつか観察される（ナーナイ 風間 1993: 220-242など）。

ムルグンと別れ別れになって、ムルグンを探して旅に出てやっと探し当てた時に、自分であることを証明するくだりがある。いわばシンデレラにおけるガラスの靴のようなものであるが、これは二本の櫛を二つに折ったものを使う。二つに折った一方をムルグンが取り、もう一方をプジンが取って、再会を期すのである（ウルチャ 風間 2006d: 127）。一般

に女性が目の粗い櫛と目の細かい櫛の二本を持っていることから、このくだりが成立しているものと思われる。

櫛はブジンにとっては重要な道具で、投げると深い茂みになり、これによって追ってくる魔物を足止めしたりすることができる（ナーナイ 風間 2008b: 111など）。

その他に、ブジンではないが、「（おじいさんと）おばあさんが一人きりで暮らしていた」、のように始まり、おばあさんを主人公に展開してゆく話もある（ナーナイ 風間 1991: 104-111, 1998: 3-27, 116-123など）。

美しいブジンとは対照的に、醜い女性の代表として、しばしばカエル、もしくはカエルのブジンと呼ばれる女性が登場する。カエルはブジンに生まれた美しい男の子を妬んで自分の子供と取り替えて攫ったり（ナーナイ 風間 2000: 266-273）、殺そうとしたりする（ナーナイ 風間 1993: 243-249）。ブジンとともに兄弟に嫁ぎ、ブジンは何事もうまくやるが、カエルはことごとくひどい家事を行う、という話もある（ナーナイ 風間 1993: 220-242）。

3.3. シャーマン

シャーマンにとって三種の神器ともいえるべき必須の道具は、タイコとバチ（とベルト）である。民話の中では、石をかまどの中へ投げ込むと、これらの道具に変わる、というくだりが見出される（ナーナイ 風間 2001: 138-139など）。石を吊るして、その揺れによって敵や敵のシャーマンの位置などを占う、ということもよく行われる（ナーナイ 風間 2005: 97など）。

魂が空を飛ぶと考えることからであろうが、シャーマンと鳥との関係は深い。さまざまな鳥のシャーマン（カラスやアオサギ、ゴジュウカラなど）が登場する話がある（ウルチャ 風間 2010c: 52-58; ウイルタ 池上 1984: 85-88）。ナーナイではカッコウやカササギのシャーマンが登場する話もある（風間 2001: 335-356）。あるウデへの話（風間 2004: 119-125）では、オジロワシ、アオサギ、スズメ、リスのシャーマンが登場する。「怪鳥」については、「3.5. 魔物」の項で後述する。

主人公に害を及ぼす悪いシャーマンが登場することもある。このようなシャーマンもたいてい鳥の姿をしていて、女性を攫う（ナーナイ 風間 2000: 201-259）。シャーマンであるかどうか明確ではないが、姉妹の鳥が木の枝に来てとまり噂話をする中で、木の下にいるムルグンにいろいろ有益な情報を与えてくれる、というくだりがいくつかの話に見出される（ウデへ 風間 2004: 85-94, ナーナイ 風間 1998: 47-62）。

他に、シャーマンの助手とも言うべき木偶（ナーナイ語では *səwəən*）が主人公を助けることもある。木偶にはいろいろな種類があり、比較的よく登場するのはシシマ・ジュウリ（*sisima juəli*）という家の守り神のような木偶である。木偶がさまざまな動物の姿などになって現れて、主人公（特にブジン）を助けるケースがよくみられる（ウルチャ 風間 2008c: 84-95, ナーナイ 風間 2001: 63-100, 2007b: 93-120など）。

3.4. 敵

ムルグンの最終的な敵、そして最大の敵として登場するのは、たいてい年輩の男である。以前にムルグンの父母を殺した者という設定になっていることも多く、その場合は「仇討ち」ということになる。

敵は不死身で、体を切り離したりしても元通りになる。敵の魂は別のところにあって、多くの場合ヒヨコ（エウエンではカッコウの卵、ネギダルではマガモ）などの形をしている（箱などに入っていたりもする）。援助者であるプジンが鳥になってどこからか持ってくるが多い。このヒヨコを殺せば敵も死ぬ。バラバラにすれば敵もバラバラになる（エウエン 風間 2009a: 29-52, ネギダル 風間 2002a: 23-29, ウルチャ 風間 1996c: 8-15, ナーナイ 風間 2007: 131-174など）。

3.5. 魔物

かなり具体的な形状を持った魔物もいる。「火打石の目を持ち、ハンマーの頭を持ち、ふいごの腹を持ち、やっとこの手を持ち、焼き串の足を持つ魔物」（ナーナイ 風間 1993: 8-18）。多少形状は異なるがほぼ同じ魔物の話がウルチャでも採集された（ウルチャ 風間 2010c: 40-51）。この魔物は、姉妹で暮らしているところに現れて姉の舌を抜くが、妹がそれを取り返す。さらに別のプジンと協力して、妹はこの魔物を倒す。魔物は粉々にされ、それは蜂や蚊、ブヨとなる。つまりこれは人間の血を吸ったりする昆虫の由来譚となっている。

木の板の体を持ち、クマの毛皮を身につけた魔物は、娘の血を吸う。見張りの者たちを眠らせてしまう力を持つが、名前を知られ、その名で呼ばれるとその力を失う。この話はナーナイのものを二度記録したが、風間(1991: 95-104)でのこの魔物の名は「スークスグジウン モーラルジアン (səək səgʲiənmooralʲian)」、風間 (2000: 195-200) での名は「アリ アムバーン (ali ambaan, ambaanは魔物の意) であった。

上半身は人間、下半身は犬で、犬の尻尾を持っている「犬怪人」(inda x očiani) の話も、2人の語り手から聞くことができた（ナーナイ 風間 2000: 27-62, 2010: 57-83）。犬怪人は家族で住んでおり、やはり人間の舌を抜く。

怪鳥はウデヘ語でk uai, ナーナイ語やウイльта語でk ooriという。ウデヘでは鉄の鳥で、男の化身であり、人の舌を抜く。銀の鳥の助けを得て男の子が射殺す（風間 2006: 107-112）。ナーナイでは家ほどの大きさの怪鳥である（風間 2000: 201-259）。ウイльтаでは「氷に穴を開ける棒の嘴があり、刀の翼があり、槍の尾羽がある鉄でできた」鳥である（池上 1984: 64）。

ウデヘの民話には「チョウグビアトゥ (čougubiatu ~ cougumiatu)」という魔物がいる（風間 2004: 279-291, 292-297）。語り手によれば、「身の丈が3メートル以上あり、全身黒く毛むくじゃらで、全身鎧を着ているように硬く強い魔物」であるという。帰宅した家が暗いと、その内側から引きずり込んで人を攫う。喉の所に唯一弱点があり、そこを射られると死ぬ。

山や森から連れて来た者は、たいてい魔物ということになっている。山からきれいな女を見つけて連れて来たが、吸血鬼であったという話（ウルチャ 風間 2006d: 133-138）、山から赤ん坊を拾ってきたが、魔物であったという話（「5.2.4. 竹取物語」で後述）などがある。

魔物は人間に取り憑いて、その人間を狂わせることもある。ambaapči-「魔物が悪く、魔物になる、おかしくなる」という意味の動詞もある。魔物になったり、魔物を取り去ったりする話はたくさんある（例えば、ナーナイ 風間 1998: 124-152など）。

3.6. その他の登場人物

特別なキャラクターを示すわけではなく、単によく登場する年輩の男性の固有名詞がある。これは興味深いことにツングース諸語間で似た形で現れる。音対応するものかどうかは不明である。特によく出てくるのはエウェンとウデヘで、それぞれカガンカン（kagankaan）、カンダじいさん（kanda mafa）、という。ナーナイでも、主にコンドン方言などでカーじいさん（kaa mapa）が登場する。Tsintsius i dr (1975: 358) では、チュルク諸語やモンゴル諸語にみられるハーン「皇帝」が来源である可能性を示唆している。これの現れる民話を示しておく（エウェン 風間 2003: 139-149など、ウデヘ 風間 2004: 176-183, 305-318など）。

他に現れる固有名詞としては、ナイスー（naisoo, ナーナイ語）、ラキチョー（lakičoo, ナーナイ語コンドン方言）などがある。

4. 表現形式・言語形式

ここでは、語り始めの表現形式（4.1.）、語り収めの表現形式（4.2.）、頭韻（4.3.）、さまざまな形容や慣用句的表現（4.4.）、挿入歌（4.5.）をとりあげる。

4.1. 語り始め

ナーナイ語文語の基礎となったナイヒン方言（本稿で単にナーナイ語と呼んでいるのはこの方言を指す）の場合、物語のはじめに特に決まった文句が使用されるということはない。ウデヘ語でも特に使用されない。他方、ナーナイ（コンドン方言）「フル〜ハイジャラー（xərəə~ xaijaraa）」、ウルチャ「ダ〜／ナ〜 ハジラテー（da~/na~ xajilati~）」、ウイльта「ダ〜 ハジラツチェー（daa~ xajilaččee）」では、「」内の文句が用いられる。どの言語でも、2つ目の単語は「どうする」という意味の語の未来形であるに由来すると考えられるので、原義は「さあ、どうなるだろうか」というような意味であったと推測できる。このようにこうした語り始めの決まり文句はアムール下流からサハリンのウイльтаまででのみ観察される。

ごくまれに、2句ずつ頭韻を踏んだ独特の表現で語り始める民話がある（これまでに3つ記録している）。その頭韻を踏んだ表現とは、以下のようなものである（太字・斜字の部分が頭韻、訳では下線部分、以下の例でも同様）。

・ *malkini malodoani, sulkini susuduani, ənəxəni əŋkuduani*, 「皆死んだ 家の真ん中
の席で、全滅した 墓場で、行った 自分の場所に、(暮らしていた、一人の若者
が)・・・」(ナーナイ 風間 1991: 111, 1993: 86, 168)

この句が物語の内容に対して何を意味しているのかは、まだ十分に明らかにできていない。

4.2. 語り納め

ナーナイの民話では、*goroa bičə, jija bičə, ələə*. 「長いこといた、短いこといた、それまで。」のような文句で終わることが多い。

他に、兄弟や姉妹などが仲良く暮らした、というようなハッピーエンドで終わる場合には、次のような頭韻を踏んだ表現で終わることもある。

・ *siksə siaxambi siŋərəji čimii siaxan čičoonzi, iŋi siaxambi isələənji, irasomaar baljiloxači ələə*. 「(姉たちはお互いに) 夕方食べた物をネズミで、朝食食べた物をセキレイ
で、昼に食べた物をトカゲで運んで暮らした、終り」(ナーナイ 風間 2000: 42)

他にも豊かになってハッピーエンドを迎える場合に、如何に裕福であったかを語る決まり文句がある。それは次のような表現である。

・ *waisi kəčərigupi siŋpuun, dui si kəčərigupi siŋpuun siamaari baljiloxači*, 「川の方へ振り向けば肉の串焼き (があつて)、山の方へ振り向いても肉の串焼き (があつて)、(いつも十分に) 食べて (豊かに) 暮らすようになった」(ナーナイ 風間 2000: 334など)

4.3. 頭韻

ツングース諸語は、日本語と同じく接尾辞型の言語であるので、語尾が同じになることは少しも珍しくない。したがって、言葉遊びや芸術的な技法ということになると、頭韻を踏む、ということになる。頭韻を踏んだ表現は、筆者がこれまで調べた限りでは、ほとんどがナーナイかウルチャのもので、ウデヘやエウエンではほとんど用いられない。以下の例は全てナーナイのものである。なおエウエンの民話には擬音語がほとんどなく、頭韻もないが、その一方で指小辞が多用され、これが一種の芸術的効果を発揮している面がある。

まず、次にみる例は、夜明けから日暮れまで縫い物をする働き者の女性たちであるということを示す表現である。

・ *jaarila japargoi, xosiktala xoji, əŋkulo əsəligui* 「一番星に (縫い物を) 手につかみ、星に 終え、明けの明星に (布を) しまい、」(風間 2000: 3)

次の例は、女主人公がスキーで行く様子を表現したもので、姿勢を示す擬態語と木の名前

とで韻を踏んでいる。

・ *mukčull tami muəruŋkulə pəgiəktuləni kotoorioo-to, tami koldon dolindolani ənəə undə* 「かがんだりしてナナカマドの木の下をくぐったり、背筋を伸ばしてそっくり返ったりして西洋杉の真ん中辺まで（跳んで）行くという」（風間 2000: 12）

漁労民であるナーナイの場合、魚の名前と親族名称で頭韻を踏む例もいくつか観察される。

・ *əoʃan agaa, guučən gugu*, 「スズキの兄さんよ、カワカマスの叔母さんよ、」（風間 1991: 64-65）

・ *əji amaa, guučən gugu, dawa dada*, 「カワカマスの叔母さん、鮭の伯母さん、チョウザメの父さん、」（風間 2006: 125）

数詞によって韻を踏んでいるものもかなり見られる。

・ *ilaani indangoko, toinga topikako*, 「三匹で犬持ちで、五人の愛人持ちで」（風間 2000: 50）

・ *nadan ǰaromba daoxani, xujun xurəmbə xuəlixəni*, 「七つの沼を渡った、九つの山を越えた」（風間 2000: 73）

・ *joan daa joə xujun daa xurbu osiəgoijiani* 「十尋の家、九尋の小屋となるように（蹴る）」（風間 1996b: 81など）

・ *xoton ǰangian xorin, ǰəsiə ǰangian ǰakpon naa ǰangian nadan olbimi ǰičini*, 「街の長を20人、天の長を8人、地の長を7人、引き連れて来た」（ナーナイ 風間 2000: 253）

4.4. さまざまな形容や慣用句的表現

まず、美人や美男に関する形容に独特な諸表現がある。

長くて美しい黒髪は、ナーナイにとって美人の条件である。

・ *nuktəni-tənii əmutu təi inda saxarin-maa, pakaa pakaa bii toojomba, inda toojoŋkini-maa biə undə*, 「その髪はまるであの犬の黒さのごとく、黒々としている、髪を巻いたものは、犬が丸くなって寝ているようであるという」（風間 2000: 319）

すばらしく美人な女性の形容には、次のような表現もある。

・ *tuə niəriini turəksələ biə simata uundii, joa niəučieni-tənii turəksələ bii ǰaǰaxa xəŋmai taini*, 「冬に外に出れば長靴のまわりにある雪が融け、夏に外に出れば、長靴のまわりにある草が乾燥したりする」（ナーナイ 風間 2000: 33-34）

美男子についての次の形容は、頭韻を踏んだ表現になっている。

・ *kadal-daa kaltaako jolo-daa joraŋko bičin, t̥ai mǝrgǝn-tǝnii undiisi-ǝ, xai-daa joran-daa anaa, kaltaa-daa anaa nai*, 「崖だって欠けている、石だってキズがあるものだが、そのムルグンときたら、何とも、キズ一つもない、欠けている所もない人だ」
(ナーナイ 風間 2000: 181, 234)

如何に優れたシャーマンであることを示すには、次のような表現が用いられる。

・ *təŋ paačilai kiarii boatoa undiisi xə~i morapsindii undiisi kuʃər nəɾə~l nəɾəl taa undə*. 「タンと(タイコを)叩くと家の屋根が鳥の羽根のようにバタバタとなり、フーイと叫び出すと、家の壁土がボロボロと崩れ落ちたりするという」(ナーナイ 風間 2000: 220など)

・ *siksə buikin nai-daa čimii xorigoʃaači~*, *čimii buikin nai-daa siksə xorigoʃaači-a*
「夕方死んだ人も朝には生き返らせ、朝死んだ人も夕方生き返らせるだろう」(ナーナイ 風間 2000: 294など)

さらに、例えば大勢の人がひっきりなしに訪れている様などは、「100人の人が入り、100人の人が出たり、していて・・・」のように表現される。人が住んでいるようだ主人公が判断するという場面では、「家の煙突からは煙が上がっている」などと表現される。ツングースの民話に限ったことではなく、口承文芸一般に言えることなのかもしれないが、総じてその表現はきわめて具体的で、生き生きとその場の状況を語るものとなっている。

民話によく現れる慣用句的な表現には、次のようなものがある。これは、物語中の地の文でもなく、登場人物のセリフでもなく、語り手自身の言葉として語られる。ナーナイの民話に頻出する表現である。これは、子供が生まれて、それが新たな主人公となってすぐに活躍を始める、という場面で発せられるものである。

・ *niŋmaan piktəni-kəə xai goidami urəgiləi*. 「民話の子供だもの、どうして長いことかかって育つはずがあろうか」(ナーナイ 風間 2001: 42, 259, 2006b: 74など)

4.5. 挿入歌

主人公のセリフが歌になっていて、その部分だけが歌われるような民話もある。ウデヘでは風間(2004: 193-199, 279-291)など、ナーナイでは風間(1991: 64-65, 1993: 5-6)などがある。風間(1993: 5-6)における歌は、「メスのサケよ、トゥルトゥントウン、こっちを行け、トゥルトゥントウン、オスのサケよ、トゥルトゥントウン、あっちを行け、トゥルトゥントウン、」のように歌うもので、日本の「ホテル来い、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、」のような歌を想起させる。

5. 隣接諸民族の口承文芸との類似

ここでは、具体的にはアイヌ（5.1.）と日本（5.2.）の口承文芸との類似、特にストーリーの内容についての類似を検討する。

5.1. アイヌ

隣の爺型の話は、アイヌではパナンペ、ペナンペという二人（「川上のもの」「川下のもの」の意）の話ということになり、「パナンペ譚」と呼ばれている。パナンペ譚は3人称で語られるので、異国の話として意識されていた可能性がある。アイヌには他民族の話と似たものが少ないが、パナンペ譚だけは例外である。サハリンにもあり、その起源はある程度古いという（以上、パナンペ譚についての記述は中川 1997: 127-134による）。

たしかにアイヌの話を読んでいっても、ツングースのものと似ているものが見出されることは少ない。しかし、パナンペ譚にはいくつも似たものが見出される。影響の方向は定かではないが、ウイルタやウルチャとの接触の結果であることは間違いないであろう。

「パナンペ死んだ真似をする」（知里編訳 1937: 76-83）によく似た話があることは、すでに「2.1.3. 隣の爺型民話」でみた。アイヌでは動物たちはカムイであるので、「賓客として招く」のが普通であり、そのことを考えても、これはやはり大陸のツングースに由来するものではないだろうか。

筆者自身は収集していないが、ナーナイなどにはキツネがクマを騙して尻尾で釣りをさせ、尻尾が凍り付いてしまうという話がある。「パナンペ氷に穴を開けてそこへへのこを挿す」（知里編訳 1937: 32-39）はやはりこれとよく似ている。滑るクマを突き刺して殺すという話があるが、これも「パナンペ尻滑り」（知里編訳 1937: 28-33）に似ている。

他に似ていると思われた話を2つあげておく。

「隣家の貧しい和人と此家の貧しい和人」（知里編訳 1937: 142-163）では、一方の和人が自分の母親を殺してそれによって街の人々を騙し裕福になるのに対して、それを真似して母親の死体を担いで街に行ったもう一人の和人がひどい目に遭って死ぬ。このくだりは「2.1.3. 隣の爺型民話」でみた「アルガツチャとブクシュガ」（ウイルタ 池上 1984: 58-61）にそっくりである。

知里編訳（1937: 192-193）には、「キムナイヌ」（やかんおやじ）というお化けのことが書かれている。サハリンの山中に住み、嵐を起こすこともあるが、人の荷を軽くしてくれることもあるという。禿頭で血を怖がるという。山中に住む、という点と、血を怖がる、という点では、「2.2.1. 巨人伝説」でみた巨人と似ている。

以上、類似した話を見たが、アイヌの口承文芸におけるさまざまな特徴は、ツングースのそれと大きく異なっている。以下では、中川（1997）を参考に、その違いについて触れておくことにする。

- ・アイヌにとってほとんどの動物は「神様」(カムイ)であるという。他方、ツングースにおいて、動物は神様ではない。山の神、海の神などはいるものの、抽象的な存在のようで、それほど言及されることがない。主人公の人間が動物などの姿で現れることはあるが、それはその「覆い」を「着る」ことによる。既述のように、動物のみならず、無生物(石、谷地坊主など)で現れることも多い。動物が1人称で語る、ということもない。
- ・アイヌの神謡では、その主人公に対応した繰り返しの文句(サケヘ)がある。神謡や英雄叙事詩では日常語と大きく異なる雅語が用いられるという。他方、ツングースでは、エウエンやエウエンキー、およびその影響を受けたと考えられるウイльтаにわずかにリフレインのある物語があるのみである。ツングースの口承文芸では、特に日常語と大きく異なる言葉が使用されることはない。
- ・アイヌの物語では、冒頭で主人公の家族構成などが詳しく語られることが多いという。ツングースの物語は、単に「姉妹で暮らしていた」、「兄弟が暮らしていた」、などのように始まり、その親についても家族構成についても語られることはない。
- ・アイヌの物語では、最後に教訓が語られることが非常に多いという。他方ツングースでは、最後に教訓などが語られることはない。最後に語り手が誰であるか確認されることもない。

5.2. 日本

日本の民話と類似したストーリーが指摘できるものもある。ここでは、因幡の白兎(5.2.1.)、猿蟹合戦(5.2.2.)、羽衣伝説(5.2.3.)、竹取物語(5.2.4.)、といったよく知られたものの他に、さらに2編(5.2.5.)を取り上げることにする。もちろん似ているとは言っても、ほんの一部分だけが似ているものもあれば、かなり細部にわたるまでその筋が一致するものもある。

5.2.1. 因幡の白兎

因幡の白兎において、ウサギがサメの数を数えるフリをしながら、その背を渡って陸へ帰るくだりとよく似たくだりを持つ民話があり、これは下記のようにアムール下流域のツングース諸民族に広く分布している。そこではウサギの代わりにキツネが陸に渡る。その後、皮を剥がれるところも類似している。そのストーリーは言語によって多少異同があるものの、おおむね次のようである。

子持ちのモモンガのところへキツネがやって来て、その子供を食う。親モモンガが困っている所へアオサギがやって来る。アオサギはキツネをつかんで舞いあがり、海に投げ捨てる。キツネが泣いていると、アザラシが現れる。キツネはおまえたちの数を数えてやろうと言ってアザラシを騙し、アザラシの上を跳んで岸へ戻る。キツネはさらに毛皮を剥がれたりするが、雨や雪を呼んで再び毛皮を生やす(ネギダル 風間 2002a: 15-22, オロチ

風間 1996a: 43-44, ナーナイ 風間 1995: 128-138; ウイルタ 池上 1984: 46-49、なお池上 1984: 49に言及があるが、この物語はニブフにもある)。

因幡の白兔に関しては、もっぱら日本の南に位置する諸民族の民話との類似が取り上げられてきたという。しかし、筆者採集の資料もその根拠の一つとして、北方との関連で捉え直す研究が出て来ている (稲田 1996)。

5.2.2. 猿蟹合戦

木登りの得意な猿が、柿の木に登って自分だけ食べ、蟹には熟していないのを投げつける、というくだりがあるが、これに似た展開を示す民話がある。それは2.1.4. で先述した「ネズミとカエル (もしくはリスとカメ) が暮らしていた」という民話で、柿はベリーの木となっているが、復讐する点まで含め、基本的に似通っているといえよう。

もう一つは、猿蟹合戦の最後に、蟹の仲間が協力して猿をこらしめるくだりと似たものが観察される、というものであり、その話の全体はおおよそ下記のようなものである。残念ながら筆者自身はまだこの話を記録していない。

一羽の小鳥がいた。別の場所に七人の妹を持つ一人の男がいた。小鳥は男を殺しにでかけた。途中で出会ったドングリと、魚の顎骨、下痢便、焼き串、それに大槌を引き連れて男の家に行った。全員所定の位置に隠れた。男が帰って来てかまどの灰をかき混ぜるとドングリが爆ぜて男の目に入った。水を飲むと魚の顎骨が喉に刺さった。下痢便に滑って転び、焼き串が体に刺さった。小鳥に突つかれて家の外に出てくるところへ、屋根から大槌が落ちてきて、男は死んだ。小鳥は二人、他の者も一人ずつ男の妹を嫁にもらって暮らした。

(ナーナイ Avrorin 1986: 91-93)

5.2.3. 羽衣伝説

下記のようなストーリーで、羽衣伝説に少し似た話がある。これも言語によって少しずつ異なっているが、おおよそ次のような話である。

貧しい男が妹と住んでいる。男が狩りに行っている時に、妹のところに美しい七羽の白鳥たちが舞い降りて、鳥の衣を脱いで女の姿になる。一番下の女が男の妹をかわいがって、毎日やって来る。兄妹は一計を案じて女の衣を奪い、隠して天に帰れなくする。男は女を妻に娶り、子供も生まれる。ある時女は衣を見つけ、子供を抱いて天に帰ってしまう。男はそれを追って天に上り、苦勞の末に妻子を取り戻して帰って来る。

(ウデヘ 風間 2004: 200-218、オロチ 風間 1996: 79-86、ナーナイ 風間 2006: 90-106、ウルチャ 風間 2006: 108-119)

妹の名前は固有名詞であり、上記の言語の順にルティグ (lutigə) /ソグーティルク (ḡəətirkə) /イーウルクン (iiwurkən) /ヌートウルキ (nəətərki) である。互いによく似ているが、対応する語であるかはわからない。

5.2.4. 竹取物語

姉妹が暮らしていて、森で赤ん坊を見つけて拾ってくる。赤ん坊は実は魔物で、姉妹の留守には正体を現す。姉妹は気づき、謀って魔物を煮て殺す。森の赤ん坊などを拾ってきたのではない。ウデへでは最後に偵察に遣ったネズミに姉妹がヤスリの尻尾をつけてやるという、ネズミの尻尾の由来譚となっている（ウデへ 風間 2004: 405-417、オロチ 風間 1996: 103-108、ナーナイ 風間 1997: 130-146）。

5.2.5. その他

次に紹介する話は、日本で記録されたものと細部に至るまで大変によく似ている。山陰の隠岐の島で採集されたということも興味深い。

ある家に姉妹が暮らしていた。姉はとても美しい女だった。姉は旅に出ることにした。妹は嫌がって、手首のところから姉の両手を切り落とした。姉は泣きながら行った。人の家の庭で木の実を食べているところを人に見つかった。その家の主人は娘がとても美しいので自分の息子の嫁にした。夫は別の土地へ仕事で出かけた。夫の継母は妻が犬の子供を産んだという嘘の手紙を書いた。夫からはその妻と子供を追い出せという返事が来たが、それも継母が書いたものだった。娘は籠に子供と服や食べ物を背負わされて追い出された。泣きながら行った。水が飲みたくなり、小川に直接口をつけて飲もうとすると、子供が籠から川に落ちた。子供をつかもうとしたその瞬間に両手が生えた。・・・（以下略）

（ナーナイ 風間 2001: 101-129）

父と母と娘が暮らしていた。母親は後妻だった。母親は畑の柿を食べたことを口実に娘の両手を切り落とした。家を出た娘は大きな家の若旦那に好かれ、嫁になった。若旦那は江戸へ修業に行った。その間に男の子が生まれた。またも母親が「癪病の子供が生まれた」と偽りの手紙を江戸に送った。「暇を出せ」という返事が来て、娘は追い出された。喉が乾き、手がないので田に直接口をつけて飲もうとしたときに、背負っていた子供が水に落ちた。その瞬間両手ができた。その後歩いていると一人の侍が通りかかり、その嫁になって暮らしていた。若旦那は江戸から戻り、事情を知ると巡礼姿になって妻を探しに旅に出た。やがて妻に出会い、二人で家に帰って幸せに暮らした。

白田監修・酒井編（1980: 127-130）「手なし娘」（山陰の隠岐諸島の知夫里島で採集）

なお、この話に限らず、姉が妹をいじめる話は多くある。妹にかわいい子が生まれたのを妬んで、水に投げ入れてしまうという話もいくつか見られる（ウルチャ 風間 2008c: 84-95）。

次の話は、部分的に類似している点があるが、残りの部分はあまり似ていない。似ている部分を中心に取り上げることにする。

お寺の小坊主さんが、「魍魎」に取り憑かれて亡くなった娘さんの死体を三晩見張る。夜中にこの死体は密封した棺桶を破って現れる。しかし八角円というものの中に入ることができず、最後には朝日にあたって魍魎たちは死んでしまう。

水木(1986)「死人つき」

(前半部省略)・・・おじいさんは一本の鉄の棒と一冊の本をくれて、どうしたらよいかを全て教えてくれた。少年が長の家よりさらに山の方へ上って行くと、鉄の柵で厳重に囲まれた家があった。少年が一番奥の部屋に入ると、棺桶があってその隣に机と椅子が一つずつあった。長の娘は死んで魔物になってしまったのだと言う。棺桶には三本の太い鉄の鎖が巻いてあった。少年は自分の座る椅子と机の周りに、鉄の棒で三回円を描いた。そして座って本を読み始めた。夜中に鉄の鎖がちぎれて、魔物になった女が棺桶から出てきた。おじいさんに言われたとおり、少年は一心不乱に本を読み続けた。魔物の女は少年がさっき円を描いたその円の中には入ってくることができなかった。三日三晩少年はひたすら顔も上げずに本を読み続けた。三日目に見張りの者が戸を開くと、娘が元の娘の姿に生き返って立っていた。少年は長の娘と結婚することになった。長は十七艘の船とその船いっぱい財産をくれた。少年は妻を連れてそれらの船で故郷へ向かった。故郷の岸辺では少年の母親が毎日毎日泣いて海を眺めていた。そこへ少年が帰り、それからは皆で幸福に暮らした。

(ナーナイ 風間 2005: 125-163)

他にも「わらしべ長者」に似た話、すなわち夢のお告げに従って物々交換を繰り返すうちに裕福になった者の話を、コンドン村のナーナイより得たが、なお未整理である。魔物の母親を騙して自分の子供の肉を食べさせるくだり(ウデヘ 風間 2004: 36-49、ナーナイ 風間 1998: 75-85)は、カチカチ山の狸が、おばあさんを婆汁にしておじいさんに食べさせるくだりに似ている。

6. 今後の課題

本稿ではツングース諸語の口承文芸について、その内容(2節)、登場人物(3節)、表現形式・言語形式(4節)、隣接諸民族の口承文芸との類似(5節)、という観点から検討を行った。筆者は言語学が専門ということもあり、見当違いな指摘や知識不足による見落とし等も多々あるものと思われる。忌憚ない御指摘を乞う。本稿の長所があるとすれば、翻訳等によるのではなく、原語の一次資料に基づいて検討を行っている点にあると思う。今後は以下のような課題を念頭においてさらに研究を進めていきたいと考えている。

- ・どの言語も危機言語であり、少しでも早く、そして少しでも多く、記録を継続・蓄積していくことが何よりも緊急の課題である。
- ・記録はしたものの、未整理／未発表の資料が大量にあり、その整理・刊行も急務である。

- ・エウエンキー、シベの民話の研究、比較・対照が重要である。
- ・アイヌや日本とツングースの中間に位置する、ニブフや朝鮮の民話との比較・対照が必要である。さらにはモンゴル、チュルク、漢、などとの比較・対照が必要である。

参考文献

アウステルリッツ, R.

1982『ギリヤークの昔話』中村チヨロ述／村崎燕子編 ロバート アウステルリッツ採録・著 北海道出版企画センター：札幌

池上二良

1984『ウイльта口頭文芸原文集』（ウイльта民俗文化財緊急調査報告書6）北海道教育委員会：札幌

池上二良

2002『増訂 ウイльта口頭文芸原文集』（ツングース言語文化論集16）文部省特定領域研究(A) 環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 成果報告書 A2-013. 大阪学院大学：吹田

稲田浩二

1996「『稲葉の素兎』試論」『梅花児童文学』4 梅花女子大学大学院児童文学会
臼田甚五郎監修・酒井薫美編

1980『魚屋と山姥 隠岐・島前の昔話』桜楓社：東京

荻原眞子

1996『北方諸民族の世界観』草風館：東京

風間伸次郎

1991「ナーナイ語テキスト」『ツングース言語文化論集1』 61-134. 北海道大学文学部：札幌

1993『ナーナイ語テキスト』（ツングース言語文化論集4）小樽商科大学言語センター：小樽

1995『ナーナイの民話と伝説』（ツングース言語文化論集5）小樽商科大学言語センター：小樽

1996a『オロチ語基礎資料』（ツングース言語文化論集7）鳥取大学教育学部：鳥取

1996b『ナーナイの民話と伝説2』（ツングース言語文化論集8）鳥取大学教育学部：鳥取

1996c『ウルチャロ承文芸原文集1』（ツングース言語文化論集9）鳥取大学教育学部：鳥取

1997『ナーナイの民話と伝説3』（ツングース言語文化論集10）東京外国語大学：東京

1998『ナーナイの民話と伝説4』（ツングース言語文化論集12）北方ユーラシア先住諸

- 民族の言語文化の資料データベース作成とその類型論的研究研究成果報告書第3分冊(金子亨編) 千葉大学文学部: 千葉
- 2000『ナーナイの民話と伝説5』(ツングース言語文化論集14) 東京外国語大学: 東京
- 2001『ナーナイの民話と伝説6』(ツングース言語文化論集15) 文部科学省特定領域研究(A) 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究報告書A2-005 大阪学院大学: 吹田
- 2002a『ネギダール語 テキストと文法概説』(ツングース言語文化論集19、文部科学省特定領域研究(A) 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究報告書A2-021) 大阪学院大学: 吹田
- 2002b『ナーナイの民話と伝説7』(ツングース言語文化論集18、文部科学省特定領域研究(A) 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究報告書A2-020) 大阪学院大学: 吹田
- 2002c『ウルチャロ承文芸原文集2』(ツングース言語文化論集20 文部科学省特定領域研究(A) 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書A2-022) 大阪学院大学: 吹田
- 2003『エウェン語 テキストと文法概説』(ツングース言語文化論集23 文部科学省特定領域研究(A) 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究報告書A2-030) 大阪学院大学: 吹田
- 2004『ウデヘ語テキスト(A)』(ツングース言語文化論集24/A 平成16年度科学研究費補助金(B)(2) (一般)「複統合性をめぐる北東シベリア・北アメリカ先住民言語の比較研究(代表: 呉人徳司)」研究成果報告書) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所: 府中
- 2005a「ソロン語口語コーパスとその分析」風間伸次郎・川口裕司編『言語情報学研究報告 8 フィールド調査による口語資料の収集及びその分析』21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科: 府中 11-43
- 2005b『ナーナイの民話と伝説8』(ツングース言語文化論集27 平成16年度科学研究費補助金(B)「アムールランド文化とアイヌ物質文化形成に関する言語・生態人類学的研究(代表: 荻原真子)」研究成果報告書) 千葉大学文学部: 千葉
- 2006a『Udihe Texts 2』(ツングース言語文化論集31) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所: 府中
- 2006b『ナーナイの民話と伝説9』(ツングース言語文化論集32) 千葉大学文学部: 千葉
- 2006c「ナーナイ語コンドン方言テキスト」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』13:83-126 北海道大学大学院文学研究科: 札幌
- 2006d『ウルチャロ承文芸原文集3』(ツングース言語文化論集30) 北海道大学大学院

文学研究科：札幌

2007a『Udihe Texts 3』(ツングース言語文化論集35) 北海道大学大学院文学研究科：札幌

2007b『ナーナイの民話と伝説10』(ツングース言語文化論集36) 北海道大学大学院文学研究科：札幌

2008a『Udihe Texts 4』(ツングース言語文化論集42) 東京外国語大学：府中

2008b『ナーナイの民話と伝説11』(ツングース言語文化論集40) 北海道大学大学院文学研究科：札幌

2008c『ウルチャロ承文芸原文集4』(ツングース言語文化論集43) 東京外国語大学：府中

2009a『Ewen Texts 2(A)』(ツングース言語文化論集45(A)) 東京外国語大学：府中

2009b『Udihe Texts 5』(ツングース言語文化論集44) 東京外国語大学：府中

2010a『Udihe Texts 6 付：文法概説』(ツングース言語文化論集47) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：府中

2010b『ナーナイの民話と伝説12 付：文法概説』(ツングース言語文化論集48) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：府中

2010c『ウルチャロ承文芸原文集5 付：文法概説』(ツングース言語文化論集49) 東京外国語大学：府中

風間伸次郎・トヤー

2007『ソロンの民話と伝説1』ツングース言語文化論集37 北海道大学大学院文学研究科：札幌

2008『ソロンの民話と伝説2』ツングース言語文化論集41 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：府中

加藤美穂

2003『ナーナイのニンマーの研究 ～風間伸次郎先生のテキストから～』千葉大学文学部日本文化学科卒業論文

知里真志保編訳

1937『アイヌ民譚集』郷土研究社：東京 [1981 岩波文庫で再刊、なお筆者はこれを参照した、引用ページ数もこれによった]

中川裕

1997『アイヌの物語世界』平凡社ライブラリー：東京

日本民話の会・外国民話研究会編

1997『世界の太陽と月と星の民話』三弥井書店：東京

水木しげる

1986『死人つき』『妖怪たちの物語』水木しげる妖怪まんが集2 ちくま文庫 筑摩書房：東京

AVRORIN, V. A.

1986 *Materialy po nanajskomu jazyku i fol'kloru*. AN SSSR. izdatel'stvo nauka: Leningrad.

AVRORIN, V. A. i E. P. LEVEDEVA

1966 *Orochskie skazki i mify*. izd. Nauka sibirskie otdelenie: Novosibirsk.

AVRORIN, V. A. i E. P. LEBEDEVA

1978 *Orochskie teksty i slovar'*. Nauka: Leningrad.

KHASANOVA, M. i A. PEVNOV

2003 *Myths and Tales of the Negidals*. Publications on Tungus Languages and Cultures 21 ELPR A2-024. Osaka gakuin University: Suita.

NIKOLAEVA, I., E. PEREKHVALSKAJA i M. TOLSKAJA (eds.)

2003 *Udeghe Texts*. ELPR A2-025. Osaka gakuin University: Suita.

NOVIKOVA, K. A.

1987 *Evenskie skazki, predanija i legendy*. Magadanskoe knizhnoe izdatel'stvo: Magadan.

ONENKO, S. N.

1980 *Nanajsko-Russkij slovar'*. Izd. Russkij jazyk: Moskva.

SEM, L. I.

1976 *Očerki dialektov nanajskogo jazyka: bikinskij (ussurijskij) dialekt*. AN SSSR: Leningrad.

SIMONOV, M. D., V. T. KJALUNDZJUGA i M. M. KHASANOVA

1998 *Fol'klor udegejcev: nimanku, telungu, jekhe*. Nauka: Novosibirsk.

SUNIK, O.P.

1985 *Ul'chskij jazyk*. AN SSSR: Leningrad.

TSINTSIUS, V. I.

1982 *Negidal'skij jazyk: issledovanija i materialy*. AN SSSR: Leningrad.

TSINTSIUS, V. I. i dr.

1975 [tom 1], 1977 [tom 2] *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskikh jazykov, Materialy k etimologičeskemu slovarju*. Nauka: Leningrad.

VASILEVICH, G. M.

1936 *Materialy po evenkijskomu (tungusskomu) fol'kloru*. nauchno-issledovatel'skaja assotsiatsija instituta narodov severa TSIK SSSR im. P. G. Smidovicha: Leningrad.